



特集

## 名古屋大学国際フォーラム 「新世紀を築く大学の英知」を開催

6月23日及び24日の両日、本学が学術交流協定を締結している24の海外主要大学の学長等を招聘し、「21世紀における大学の使命と役割」をメインテーマとする基調講演及びパネルディスカッション、また、参加機関の連携の基盤組織としての「国際学術コンソーシアム(AC21)」の創設とその活動内容を論議する総会が開催されました。

23日の基調講演及びパネルディスカッションは本学豊田講堂において、日英同時通訳付で一般公開され、学外から約400名、学内関係者約1,100名の計1,500名にのぼる参加者を得て実施されました。松尾総長による開会のあいさつに続いて、小野文部科学事務次官、神田愛知県知事による来賓あいさつがあり、本フォーラムの開催趣旨等に対する賛辞が述べられました。続いて、ミシガン大学名誉学長のJ. J. デューダーシュタット氏による「21世紀における大学の役割」についての講演、

トヨタ自動車株式会社名誉会長の豊田章一郎氏による「大学に期待すること - ものづくりは人づくり」についての講演が行われ、多数の聴衆が熱心に聞き入っていました。また、午後には、25大学の学長等がパネラーとなり「21世紀における大学の使命と役割」について活発な意見交換が行われ、盛会のうちに第1日目が閉会しました。

24日は、名古屋市内のホテルにおいて、参加機関と本学関係者による総会が開催されました。総会ではAC21の創設と活動計画等について、熱心に意見交換が行われ、全参加機関の25大学等が、学生および教職員の活発な交流の促進、研究上の関心および学術上の活動に関する情報の共有の促進、適切と認められる範囲内での連携教育プログラムの開発の促進を基軸とした「コミュニケ」に署名し、本フォーラムは成功のうちに終了しました。



J. J. デューダーシュタット氏



豊田章一郎氏



小野文部科学事務次官



神田愛知県知事

## 総長あいさつ

1990年以降、今日に至るまでの十数年間に、特に世界の政治・経済・産業構造を初めとしたあらゆる分野で、非常に大きなパラダイム・チェンジが起こっています。2000年には新しいヨレニウムが始まり、昨年から21世紀に入りました。私たちはこのような特別な時期に責任ある立場を得、また、働き盛りにあるという幸運に恵まれたことを強く感じています。

名古屋大学は、研究重点大学・教養教育重点大学の両立を目指している日本の指導的な基幹大学の一つです。例えば、2001年のノーベル化学賞受賞者の一人は我が大学の現職の野依教授です。大学は、国内的にはもちろんのこと、国際的な貢献をも常に強く求められています。そのために、私は新しいヨレニウム、21世紀を迎えるにあたり、名古屋大学にとって意義のある事業を行いたい、しかも、打ち上げ花火のように一過性で終わるものではなく、10年をマイルストーンにし、少なくとも30年は続くような継続性のある事業をスタートさせたいと強く考えるに至りました。

一方、これらを考えている過程で、常に私の頭から離れなかったことがあります。それは地球規模から地域の規模すべてを包含した、社会に対する大学の使命・役割です。これは、内部からだけでなく外部から見えていく必要がありますが、特に国際的な見地から常に見直しをしていかなければならない問題だと考えました。

国際的な見地からの取り組みとしては、名古屋大学は既に世界の多くの大学と学術交流協定を結んでおります。部局間協定は129大学と協定を結んでおり、全学間協定は40大学と協定を結んでおります。しかし、これらの協定が本当に実のある実績を伴って活用されているかどうか、という疑問が私の頭の中からいつも離れませんでした。

そういった中で最終的に到達した私の考えは、もし学術交流協定、特に全学的な協定を締結している世界の主要大学のいくつかから同意が得られれば、定期的に会合を持って社



会に対する大学の使命や役割を共に考え、そして協働して実行していけるような定常的な組織や事業といったものを持つことです。結果的には私の当初の予想を上回る世界の一流大学の賛同が得られ、この意義深い事業がスタートできるようになりました。

この事業は新しいヨレニウム、新世紀を期して、名古屋大学が中核になり進めようとする事業であり、教育研究機関である名古屋大学が、将来に亘ってその存在価値を問われるものの一つであると考えております。世界の主要大学が協働で事業を進めていただけることは、望外の喜びでありますが、提唱者である名古屋大学が常に主催大学の一つとして、応分の責任を担ってまいらなければならないことは十分に自覚しております。

折に触れてよく言うのですが、動物の中で自己にやがて必ず死が訪れることを確実に自覚した上で、自分が既に生存していない未来の社会を考える動物は、人間だけだと思っています。名古屋大学国際フォーラムではどうか、われわれの未来の世代に思いをめぐらせ、30年間位は風化をしない高い理想を掲げて語り合ひましょう。そして、共同コミュニケをまとめ、その下に実のある組織や協働の進め方について、皆様とともにしっかりと詰めていきたいと考えています。私のこの強い思いをご理解くださり、実のある会合にさせていただくよう心から希望いたします。

名古屋大学総長 松尾 稔

# Communiqué International Forum 2002 in Nagoya

## 1. Objectives of the International Forums

The universities and institutions participating in International Forum 2002 under the title "The University-Architect of the New Century" have agreed to establish an international network in order to encourage the further advancement of global cooperation to the benefit of higher education and to contribute to world and regional society.

## 2. Roles of the International Forums and Academic Consortium 21

- (1) We, the member institutions, have agreed that the International Forums shall be held regularly to advance the objectives.
- (2) We have agreed to establish "Academic Consortium 21 (AC21)" for promoting interna-

tional academic exchanges among its member institutions in a strong spirit of cooperation.

- (3) AC21, with the mutual collaboration of its member institutions, shall conduct activities contributing to world and regional society.
- (4) AC21 shall promote the following activities among its member institutions:
  - 1) active exchanges of students, faculty members and administrative staff;
  - 2) shared access to information on research interests and academic activities; and
  - 3) as appropriate, development of cooperative educational programs.

We hereby agree to accept the objectives and roles outlined in this Communiqué.

24 June 2002



## コミュニケ 名古屋大学国際フォーラム

### 1. 国際フォーラムの目的

名古屋大学国際フォーラム( International Forum 2002 )「新世紀を築く大学の英知( The University-Architect of the New Century )」に参加した大学および研究機関は、高等教育の発展のためにグローバルなレベルでの相互協力をより一層促進させると共に、国際社会および地域社会に貢献するため、国際的な学術ネットワークを構築することに合意する。

### 2. 国際フォーラムと国際学術コンソーシアムの役割

- (1) 我々メンバー機関は、この目的を達成するため、国際フォーラムを定期的で開催することに合意する。
- (2) 我々は、国際的な学術交流を促進するために、相互に協力して「国際学術コンソーシアム( Academic Consortium 21: AC21 )」を創設する

ことに合意する。

- (3) 国際学術コンソーシアムは、メンバー機関相互の協力の下で、国際社会ならびに地域社会に貢献できる活動を行う。
- (4) 国際学術コンソーシアムは、メンバー機関の間で、次の活動を推進する。
  - 1) 学生および教職員の活発な交流
  - 2) 研究上の関心および学術上の活動に関する情報の共有
  - 3) 適切と認められる範囲内での連携教育プログラムの開発

我々は、このコミュニケに合意することを証するためにここに署名する。

2002年6月24日



コミュニケに署名する松尾総長



## AC21 参加機関(2002年6月24日現在)と署名者

シドニー大学(オーストラリア)

学長: Gavin Brown

華中科技大学(中国)

学長: Mingwu Fan

吉林大学(中国)

副学長: Shilun Qiu

南京大学(中国)

副学長: Jun Chen

東北大学(中国)

副学長: Maofa Jiang

北京大学(中国)

副学長: Zhipan Wu

上海交通大学(中国)

学長: Sheng-Wu Xie

同済大学(中国)

学長: Qidi Wu

浙江大学(中国)

副学長: Mingjiang Ni

ボンゼシヨセ工科大学(フランス)

副学長: Alain Neveu

ケムニッツ工科大学(ドイツ)

学長: Günther Grünthal

フライブルク大学(ドイツ)

工学部長: Wolfgang Menz

ブネー大学(インド)

学長: Ashok S. Kolaskar

ガジヤマダ大学(インドネシア)

学長: Sofian Effendi

名古屋大学(日本)

総長: 松尾 稔

慶尚大学校(韓国)

学長: Choong Saeng Park

木浦大学校(韓国)

学長: Woong-bae Kim

ラオス国立大学(ラオス)

学長: Somkoth Mangnomek

東南アジア文部大臣機構農業高等教育研究  
地域センター(フィリピン)

センター長: Ruben L. Villareal

チュラロンコン大学(タイ)

学長: Tatchai Sumitra

カセサート大学(タイ)

副学長: Supamard Panichsakpatana

シェフィールド大学(イギリス)

社会科学学部長: James H. Grayson

ウォリック大学(イギリス)

学長: David VandeLinde

ノースカロライナ州立大学(アメリカ)

学長: Marye Anne Fox

ミシガン大学(アメリカ)

工学部副学部長: Stella W. Pang

# 日 程

## 国際フォーラム

日 程	内 容	時 間
6月22日(土)	レセプション	18:30~
6月23日(日)	公開討論会	
	開会式	9:30~10:00
	基調講演	10:00~12:00
	パネルディスカッション	14:00~17:00
6月24日(月)	国際フォーラム総会	9:00~17:30
	記者会見	17:30~18:00

## サテライトフォーラム

日 程	主 催	内 容
6月15日(土)~16日(日)	文学研究科	国際シンポジウム「比較語彙研究」
6月20日(木)	教育発達科学研究科・ 附属中等教育研究センター	中等教育改革の国際比較 - 危機と改革 -
6月21日(金)~22日(土)	法学研究科・ 法政国際教育協力研究センター	体制移行にともなう法整備と法学教育
6月21日(金)	工学研究科	21世紀の工学を考える
6月20日(木)~21日(金)	生命農学研究科・農学国際教育 協力研究センター・生物分子応 答研究センター	アジアにおける持続可能な農業システムの構築
6月20日(木)~22日(土)	環境学研究科	偏西風の吹く地域の環境：アジア大陸影響に関するこれからの研究・教育
6月21日(金)~25日(火)	大学史資料室	特別展示「名古屋大学の軌跡 - 国際社会との知的交流」
6月24日(月)	医学系研究科	新世紀における医学部卒前教育方法及び国際学術交流の意義
6月26日(水)	留学生センター	大学間学術交流の新戦略
6月27日(木)~28日(金)	理学研究科	天文学における国際共同：南天観測への国際ネットワークの構築に向けて
6月29日(土)	博物館	姉妹校博物館連携による知の創造と共有
7月5日(金)~6日(土)	経済学研究科・ 国際経済動態研究センター	21世紀アジアにおける地域・農村の社会経済の課題と展望

**特集**

## 名古屋大学国際フォーラム サテライトフォーラム 工学研究科

### 21世紀の工学を考える

工学研究科は、6月23日～25日の3日間にわたって開催された名古屋大学国際フォーラムの関連イベントとして、6月21日に市内において、「21世紀の工学を考える」をテーマにサテライトフォーラムを開催しました。

このフォーラムは、本研究科において試みられてきた種々の教育・研究体制における成果と将来展望を紹介し、世界の大学の工学教育・研究体制・将来展望を理解するとともに、工学の将来像（工学の役割、目標、人材育成等）について議論し、グローバルな観点から「21世紀の工学像」について考えるとともに、将来の工学像を構築するための国際的情報交流と協力体制の可能性を探ることを目的に開催されたものです。

当日は、一般市民を含め、186名が参加し、後藤工学研究科長の開会のあいさつに続き、松尾総長、富浦日本学術会議第5部部長（株式会社日鉄技術情報センター顧問）Chih-Ming Ho カリフォルニア大学副学長（アメリカ）による基調講演があり、それぞれの立場

から工学教育に対する考えや提言が述べられました。特に、松尾総長からは、20世紀までにすでに確立され、認知されている学術・技術分野の「領域分野」を融合した「文理融合型工学」を目指して欲しいとの力強い講演がありました。午後からは一般講演を行い、後藤工学研究科長、James W. Taylor ウィスコンシン大学ナノテクセンター副所長（アメリカ）Stella Pang ミシガン大学工学部副学部長（アメリカ）Alain Neveu ポンゼショセ工科大学副学長（フランス）Dieter Happel ケムニッツ工科大学副学長（ドイツ）Maofa Jiang 東北大学副学長（中国）が、各大学の工学教育の実情や問題点及び展望について語りました。その後、パネルディスカッションが行われ、一般講演の講師の方々をパネラーに、講演内容の質問を中心に将来の工学について、参加者と意見交換を行い、同研究科が行っている教育改革と今後の展望に向けて大いに参考になりました。



開会のあいさつをする  
後藤工学研究科長



基調講演を行う松尾総長



パネルディスカッション

**特集**

名古屋大学国際フォーラム

サテライトフォーラム

生命農学研究科

## アジアにおける持続可能な農業システムの構築

生命農学研究科・農学部、農学国際教育協力研究センター及び生物分子応答研究センターは、合同で6月20、21日の両日、「アジアにおける持続可能な農業システムの構築」と題し、名古屋大学国際フォーラム・サテライトフォーラムとして、学术交流協定を締結している海外の大学及び研究機関（オーストラリア、フィリピン、インドネシア、韓国、米国、台湾、タイ、タンザニア）並びに国内の研究機関から、17名の講演者を招へいして開催し、農学部第12講義室を会場として、学外参加者、学部学生、大学院学生、教職員等両日とも300名近くが参加しました。

このサテライトフォーラムでは、「持続的生産」の概念が提唱されて10年が経過した、現時点での「持続的生産」の概念の整理に加えて、具体的な実践例と課題を議論の重点とし、特に大学が果たすべき役割を意識しつつ、1日目は、アジアの特性を考慮した持続的

な農業展開のためのツールとしての生産システム及びバイオテクノロジーといった観点から話題を取り上げました。2日目は、そのようなシステムを構築するための、より社会科学的な側面から話題を取り上げました。参加者からは、すべての講演に対して熱心な質疑が出され、持ち時間をオーバーすることもしばしばでした。

このサテライトフォーラムの掲げたテーマは、短期間の会議で結論の出せるものではありませんが、日頃、基礎的な研究に埋没している学生・教職員にとって、俯瞰的な観点からアジアの生物生産を考え、また協定校の存在や外国人卒業生の活躍を意識するとともに、今後の学术交流の推進と研究教育のさらなる発展のための指針を与える良い機会となり、成功裡に終えることができました。



**特集**

名古屋大学国際フォーラム

サテライトフォーラム

医学系研究科

## 新世紀における医学部卒前教育方法及び 国際学術交流の意義

医学系研究科サテライトフォーラムが、6月24日、市内において、「各国の大学における新世紀の医学教育方法と国際交流の意義」について開催されました。

午前の部では、「新しい世紀の医学部教育を求めて」をテーマに、医学教育の権威である植村研一 愛知医科大学教授を座長に、ペンシルバニア大学副医学部長のシルバーク教授、ノースカロライナ大学医学部長のデント教授、チューレン大学医学部長のテラー教授（以上アメリカ）、フライブルグ大学（ドイツ）医学部のストー教授、グダニスク大学（ポーランド）医学部のウズニアク教授及び伴 医学部附属病院教授から、現状の教育システム及び方針についての報告と、活発な質疑応答が行われました。

続いて行われたパネルディスカッションでは、授業料の問題（無料から33,000ドル/年）、学生が学生を教える・レジデントが学生を教えるシステム、インターネットのウェブを利用するシステム、PBL（提案された問題についての勉強）システム、学生に自分で勉強できる時間を作るために教える内容を減らす問題、

患者の入院期間が短くなって外来に臨床教育が移っていく傾向にあること、医療倫理の問題等について討議されました。

午後の部では、チューレン大学の有村章 助教授を座長とし、国際交流の意義を主題として討論されました。まず、ノースカロライナ大学のスタック国際交流部長から、国際交流の現状が話され、続いて本学への留学経験者のハーバード大学のクニモト医師、ノースカロライナ大学のマックコーマック医師、グダニスク大学のウズニアク教授、そしてフライブルグ大学のフェッター医師から、その経験についての報告と、各大学の実経験に基づいた改善策の提案がありました。その後、本学医学部からもハーバード大学、チューレン大学への留学経験者である神谷、田中の両医師から報告がありました。

フォーラムでは、医療、治療の国による、あるいは大学による違いが示され、情報交換によりこれからの国際交流の必要性等について相互の確認があり、今後の医療及び医学教育に多くの材料が与えられました。



## 特集

名古屋大学国際フォーラム  
サテライトフォーラム 博物館

## 姉妹校博物館連携による知の創造と共有

名古屋大学国際フォーラム2002の一環として、6月29日と30日の2日間、博物館サテライトフォーラム「姉妹校博物館連携による知の創造と共有」が開催されました。

このフォーラムは、名古屋大学博物館と海外の学術交流協定締結校の大学博物館や主要な博物館との連携をさらに推進させ、長期的視野に立ったよいパートナーシップを構築することを目的とし、29日の午前は国際大学博物館協議会（UMAC）議長のピーター・スタンバリー博士（オーストラリア、マッコーリー大学）による特別講演会が、午後からは第5回 NUMCo（博物館コンサート）を挟んでパネルディスカッションが行われました。

特別講演会では、大学博物館の国際的な連携の重要性と、国際的にも大学博物館における次世代教育等への期待の高まりについての紹介がありました。その中で、UMAC についての最新情報は、今後の本学の博物館活動にとって非常に役立つものでした。特別講演の内容については、博物館の吉田英一助教授による日本語の通訳があったため、一般市民を交えた約50人の参加者にとって理解しやすいものとなりました。

午後1時半からの博物館コンサートでは、海外からのフォーラム参加者を含め約80人の聴衆を前にして、ヴァイオリンとチェロの演奏が行われました。引き続き行われた

パネルディスカッションには、シドニー大学マックレー博物館のヴァネッサ・マック館長、韓国の木浦大学校博物館の崔盛洛館長、ドイツのゼンケンベルグ博物館のヨアヒム・シヨルツ主任研究員、元ロンドン自然史博物館展示・教育部長のジャイルズ・クラーク博士、名古屋市科学館の樋口敬二館長及び名古屋大学博物館長の足立教授がパネラーとして、博物館連携のあり方や各博物館の抱える問題点等について話題提供をし、それに基づいて活発な意見交換が行われました。特に大学博物館が有する「人」「標本」「情報」について、具体的にどのような国際的な連携が可能であるのか、あるいは国際的な博物館ネットワークによる知の共有が21世紀の大学教育にどのように活かせるのかなどについて、様々な角度から議論が行われました。さらに、木浦大学校博物館長からは、2000年に新設された5500㎡の博物館の建物と展示品の紹介もあり、注目を集めました。

6月30日には、海外からの参加者と博物館スタッフの11名で名古屋市科学館と愛知県陶磁資料館の見学会を行い、展示方法などについて現地討論会を行いました。

今回のサテライトフォーラムは、今後の博物館連携に向け、お互いの情報を共有し合う出発点として有意義なものとなりました。



姉妹校博物館等からの出席者による  
パネルディスカッション



ピーター・スタンバリー博士による特別講義

特集

名古屋大学国際フォーラム

サテライトフォーラム

経済学研究科

## 21世紀アジアにおける 地域・農村の社会経済の課題と展望

経済学研究科・同附属国際経済動態研究センターは7月6日に、「名古屋大学国際フォーラム」の一環として、サテライトシンポジウムが「21世紀アジアにおける地域・農村の社会経済の課題と展望」(Tasks and Prospect of Rural Socio-Economy in the 21 Century Asia)をテーマに開催されましたが、これは同時に、同センター恒例の第17回国際シンポジウムを兼ねて行われたものです。このテーマの主旨は、アジアのグローバル化・都市化の中で、地域・農村が都市との関係を強めており、産業も農業だけでなく非農部門を加えて多様化し、農村住民が兼業化し人口も流動化している現状を踏まえて、もっとリアリティーのある「オルタナティブな持続性」を構想することにあります。農村の持続性のあり方を考えるとき、その対象を狭く農業部門だけに限定してしまうと、実は、先進地では一部の農家しか実現できず、また、後進地では全農家の貧困を再生産することになりかねない、という反省をも込めた結果のテーマ設定でした。

開会に際して、佐々木副総長、松枝キタン会副会長及び岸田経済学研究科長のあいさつがあり、その後の第1セッションでは、北原淳(当センター教官)「アジア農村の

多様化と持続性の質についての再検討」、河村能夫(龍谷大学副総長・教授)「農業共同体のもうひとつの発展スキーム:日本の経験にもとづいて」、李国慶(中国社会科学院教授)「21世紀中国の農民・農村社会・農業の諸問題:WTO加盟を中心に」、の各報告が行われました。そして午後の第2セッションでは、崔相浩(韓国精神研究所長)「韓国農村開発の成功主因としての共同農村教育」、アノージャ・ウィクラマシンゲ(ペラデニア大学教授)「スリランカ農村経済発展に対するインフォーマル部門の展望と潜在能力」、また第3セッションでは、カンダー・パラナキアン(カセサート大学)「タイ政府による農村貧困軽減政策」、サユティ・ロシアディ(マタラム大学)「インドネシア・ロンボク島の持続的農業開発」の各報告が行われました。

最後の総合討論を踏まえて、議論の主要な論点が、(1)農村開発では共同体や地域の組織や意識等の社会的・文化的な資源が重要である、(2)アジア農村では開発政策が大きな影響を与えている点を確認し、それをさらに分析的に検討する必要がある、(3)農外部門の発展によって農村経済の多様化が進んでおり、その本格的な分析がますます必要である、といった諸点にあると整理されました。





## 社会連携推進のための 「名古屋大学総合案内」を開設

本学は、「名古屋大学学術憲章」や運営諮問会議の答申を受け、社会の大学に対するニーズに応えるため、社会連携の組織的・総合的な組織である社会連携推進委員会、社会連携推進室（名古屋大学総合案内）及び産学官連携推進本部からなる社会連携推進体制を新たに5月からスタートさせるとともに、大学と地方自治体の間における社会連携に関する情報交換、事業協力及び交流活動を通して地域振興を図ることを目的として愛知県・名古屋市に働きかけ、社会連携協議会を設置しました。

社会連携推進室は、今まで教官個人や各部局独自で展開していた社会との連携を大学全体で応援できる体制として、自治体等や住民の要請にこれまで以上に応えるため広報プラザ内に「名古屋大学総合案内」として設置されたもので、市民からの相談・依頼から産

学官の連携までの総合窓口として対応します。総合的な窓口の設置は国立大学としては初めてとなります。

また、産学官連携推進本部は、産学官連携の重要性が増している現在、効率的かつ迅速な対応と明確な意志決定を可能とするとともに、大学として産学官連携に組織的に関わる体制を発足させることによりユーザー（利用者）の視点に十分応えるため、総長直属の執行機関として設置されました。

なお、6月27日には、松尾総長、奥野総長特別補佐、佐々木、伊藤両副総長、小池事務局長、後藤産学官連携推進本部長（工学研究科長）、坂神社会連携推進室長（総長補佐）等出席の下、関係職員が見守る中、盛大に銘板除幕式及び上掲式を挙行し、あらためて社会連携推進の充実を期しました。

名古屋大学総合案内

電話：052（789）5111



社会連携推進室（名古屋大学総合案内）の銘板除幕式



産学官連携推進本部の銘板上掲式



## 情報連携基盤センターの銘板上掲式等が行われる

本学では、大型計算機センターが廃止され、4月1日付けで情報連携基盤センターが設置されたことに伴い、銘板上掲式が6月28日に行われ、学内関係者が見守る中、松尾総長、伊藤副総長、佐々木副総長、阿草センター長により銘板が上掲されました。

同センターは、情報技術を駆使して教育研究活動を継続的・体系的に支援し、ソフトウェア、ネットワーク及び研究成果のデジタル化技術の研究開発、情報技術者養成による情報システム管理体制の確立、知的財産の集積・保存管理などを目的として設置されたもので、高度情報化社会に対応できる大学の情報環境を整備拡充するため、情報基盤を統一的に企画・立案するセンターとして期待されています。

また、同センターは、6月3日に情報通信の普及促進に多大な貢献をしたとして、東海総合通信局長情報通信月間表彰を受けました。

同センターは、通信・放送機構（TAO）の研究開発

用ギガビットネットワーク（JGN）への接続装置（ノード）設置機関で、平成11年度からJGN利用プロジェクトのうち「地域間相互接続プロジェクト」に参加しており、最近実用になりつつあるMPLS技術を利用したネットワーク経路制御技術の開発実証プロジェクトDIST-IX（<http://www.distix.net/>）にも加わっています。さらに、平成13年度より次世代ネットワーク技術として話題になっているIPv6の実験網である「JBプロジェクト」にも参加し、JGN IPv6の東海地区ネットワーク運用センターの機能も引き受け、核融合科学研究所や長野県情報技術研究所と名古屋市立大学等によるプロジェクトの接続支援も行っています。

今回の表彰は、これらの活動により、同センターが情報通信の普及促進に多大な貢献をしたと認められたものです。





## 高効率エネルギー変換研究センターの 銘板上掲式が行われる

今年度学内共同研究施設として設置された、高効率エネルギー変換研究センターの銘板上掲式が6月28日に執り行われました。

式では、松尾総長、伊藤、佐々木両副総長ほか学内関係者多数の出席の下、松尾総長、菊山センター長の手により銘板が上掲されました。

高効率エネルギー変換研究センターは、14年度概算要求事項で認められたもので、時限到来により廃止された前身の高温エネルギー変換研究センターを拡充して設置されたものです。前身のセンターでは、故新井紀男教授をはじめとするスタッフの尽力により、高効率なエネルギー変換が可能である新規のケミカルガスタービン発電を世界に先駆けて提唱し、多大な成果を

あげてきました。同センターでは、高効率エネルギー変換技術の分野でフロントランナーとなるべく、前センターで得た要素研究の成果をさらに発展させ、化石燃料の化学エネルギーを利用したケミカルガスタービンの基盤研究と廃熱等の低位エネルギーの有効利用技術研究を融合し、従来40%程度に過ぎなかった発電効率を80%以上の限界効率にまで高め得る最先端技術の研究開発を目指しています。同センターによるこれらの研究は、限られた資源である天然ガスや石油などの化石燃料を高効率に活用し、経済成長、エネルギーの需要供給及び環境保全に資する研究を行うとして、学内外から大きな期待が寄せられています。





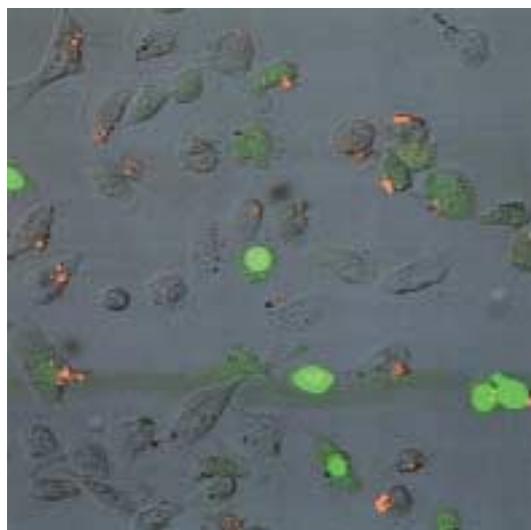
## 21世紀の脳神経外科医療の課題 脳腫瘍の遺伝子治療と脳卒中救急医療情報ネットワーク

吉 田 純

私が専門としている脳神経外科学は、欧米において神経学と外科学の延長線に確立された学問であります。我が国では私共名古屋大学の初代外科学教授である斎藤眞先生が中心となり、1948年日本脳神経外科学会が発足しています。その後、神経解剖学、神経化学、神経病理学あるいはX線診断法の進歩に伴い、また1970年代には顕微鏡手術やCTスキャン、さらにPET、MRI等の高度な画像診断技術の開発により、そして1990年代には内視鏡手術、脳血管内手術、ガンマーナイフ等の新しい手術治療法が次々に確立されると脳神経外科医療は一変しました。脳腫瘍、頭部外傷、脳卒中等の死亡率が減少し、直接目で見える形で社会に貢献できるようになりました。しかし一方では、治療法のない悪性脳腫瘍、治療のゴールデンタイムが指摘されている脳梗塞、関連遺伝子が同定されてきたパーキンソン病は、いずれも21世紀に新しい治療法の開発が期待されている難病です。私共もこれらの難病を克服するための研究を他分野の研究者と共同して進めています。その中で特に私共が21世紀の脳神経外科医療の課題として取り組んでいる脳腫瘍の遺伝子治療と脳卒中救急医療情報ネットワークの開発についてご紹介致します。

### 脳腫瘍の遺伝子治療

私共が進めている脳腫瘍の遺伝子治療は、純国産技術を用いた日本独自の遺伝子治療薬の開発であります。東京大学谷口維紹教授がクローニングしたヒト型インターフェロン遺伝子と、応用生化学研究所の八木國夫博士と私共が共同開発した正電荷多重膜リポソームを、日本の製薬企業の協力にて製剤化し、この製剤の品質と安定性そして安全性を調べ、遺伝子治療法ではなく、遺伝子治療薬として開発しました。臨床応用は企業主体の臨床試験ではなく、大学中心の臨床研究と



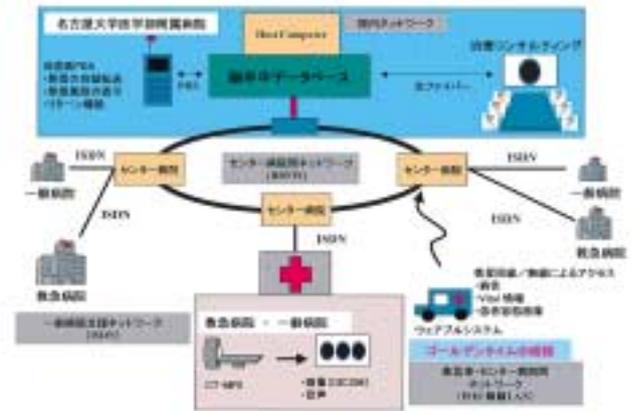
ヒトグリオーマ細胞に付着したEGFP遺伝子包埋リポソーム（赤）とその遺伝子産物（緑）

して第1、2相臨床試験を行っています。実際の治療に際しては、名古屋大学内に新設した遺伝子治療製剤調整室にて治療薬であるDNA製剤を調整し、これを第3者機関にて、純度と安全性を検討し合格したものを使用しています。臨床第1例は一般社会が注目する中で、2000年4月、31歳の女性に行い、以後現在まで5例の患者さんに治療をおこなっています。中間報告では、本治療法の安全性と有効性が確認されています。今後はこれまでの治療成果の評価に基づき、悪性脳腫瘍に対するインターフェロン遺伝子治療の実用化へ向けて、新GCP下、医師主導型臨床試験を進めていく予定です。又本治療を他の癌腫や他の疾患にも応用すべく、基礎研究を進めています。

### 脳卒中救急医療情報ネットワーク

全国の脳卒中患者さんは147万人、死亡率は癌、心筋梗塞について第3位、発症後1年以内に5人に1人

が死亡（脳動脈瘤は3人に1人）。そして患者さんの半数は入院や在宅ケアを受けられ、約3人に1人が社会復帰されておられます。また寝たきり患者の4割、要介護者の3割が脳卒中によるもので、医療費は全医療費の約1割（2兆円）を要する疾患であります。一方、最近の画像診断の進歩と外科治療法、血管内治療法の開発により、脳卒中は治る病気、治しうる病気になってきました。ただ、脳卒中の約半数を占める脳梗塞は超急性期（ゴールデンタイムといわれる3・6時間以内）の治療が大きく予後を決めます。そこで名古屋大学脳神経外科教室はこれまで愛知県下11の診療機関（8つの中核病院、3つの一般救急病院）と愛知県医師会及び同大医学部附属病院をイントラネットで結んだ地域型脳卒中救急医療支援システムの開発を行い、CT、MRI等の画像転送を含めた救急医療情報支援システムが脳卒中救急医療に大きく貢献出来ることを実証してきた。そこで現在本システムを年間6000例以上の脳卒中患者さんの入院治療に携わっている関連病院全体に拡大し、それに名古屋市消防局の協力を加えた新しい脳卒中救急医療構想の実現を目指したいと準備を進めています。



愛知県脳卒中救急医療情報ネットワークの概要

## プロフィール

よしだ じゅん

昭和20年生まれ。名古屋大学医学部卒業。専門は脳神経外科学と遺伝子治療学。同大学医学部助手、講師を経て平成8年2月同大学医学部教授。平成11年4月より同大学大学院医学研究科教授。平成14年4月より同大学遺伝子、再生医療センター長兼務。その間、昭和51年より52年までニューヨーク大学に留学。平成10年ピッツバーグ大学客員教授。平成11年・13年文部科学省高度先進医療開発事業「脳腫瘍の遺伝子治療」、平成12年・13年文部科学省地域連携推進研究事業「愛知県脳卒中救急医療支援システムの構築に関する研究」の研究代表者。日本脳神経外科学会ガレヌス賞、東海読売医学賞受賞。文部科学省専門委員（遺伝子治療）。





## 「IB 電子情報館」が文教施設部長賞を受賞

本学総合研究棟（IB 電子情報館（S10-1、建築面積 987.30㎡、延面積8,803.11㎡））が、平成13年度国立学校優秀施設表彰文教施設部長賞の計画部門で受賞しました。

この国立学校優秀施設表彰は、国立学校において整備された施設の中から、特に計画、設計の優れたものが表彰されるもので、文部科学省で昭和61年度から実施されており、今年度で16回目となり、国立学校の施設担当部課等の技術の向上を図り、さらに、施設の充実・向上に資することを目的としています。

今回、平成12年度中に完成した施設（建物群）のうち、工事事務所長等から推薦された40作品について審

査が行われ、この審査結果（14作品を表彰候補に選定）に基づき、文教施設部長が12作品を文教施設部長賞受賞施設に決定し、同施設は、計画部門で栄誉ある受賞に輝きました。

なお、同施設は学部等の枠を越えて全学共用で利用する共同利用スペースを有する総合研究棟であり、流動的なプロジェクト型の教育研究を支援するための施設で、利用者を全学から公募・選定し、創造的な教育研究活動に対応できる施設として、また優れた研究成果を生み出す環境を創出する施設として期待されています。



IB 電子情報館





## 理学部・理学研究科が第3回懇話会を開催

理学部・大学院理学研究科広報委員会は、第3回理学懇話会を6月26日にシンポジオンホールにおいて開催し、教職員、一般市民を含め約150名が参加しました。

この懇話会は、広報活動の一環として、最先端の研究の現状等について教職員、大学院生及び学部学生を対象にわかりやすく説明し、同分野の研究だけでなく異分野の研究を理解しあうことにより、相互に研究上の刺激や活力を得る場となることを目指して平成13年度から企画されたものです。これまでは理学関係の教職員のみ案内してきましたが、今回は広く研究成果を社会に発信し、理学部・理学研究科と社会との連携をより深めるために、全学の教職員、一般市民にも呼びかけて開催しました。

懇話会は、山下理学研究科長のあいさつから始まり、大峯 巖 同研究科教授から「水、水、水、どうしたって水；水の多様な物理化学的性質」をテーマに、ネイ

チャーの表紙を飾った、水が氷になる瞬間の分子運動を世界で初めてコンピュータで再現した最先端の研究成果をはじめとし、凍る瞬間の分子運動の映像や、液体状態の水の中でのエネルギーの揺らぎの音、さらには、「水はなぜ液体なのか？」「冷凍人間は生き返るのか？」などのたとえを交え、水、氷、アモルファス氷に関する講演が行われました。続いて、河合崇欣 環境学研究科教授から「バイカル湖における古環境変動解析と地球環境問題」をテーマに、世界最古、最深、最大容積の湖であるバイカル湖における、壮大で豊かな自然や生物に関する説明から、湖底堆積層柱状試料を用いて解析を進めている過去1200万年の環境変動の歴史等、最深の国際共同研究の研究成果まで、一般市民にも分かりやすく説明されました。

講演後も、異分野の研究者から活発な意見交換や質問があり、大変有意義な会となりました。



大峯教授による講演



河合教授による講演



## 博物館が第3回ネイチャーウォッチングを実施

博物館では、第3回ネイチャーウォッチングを5月25日に実施し、市内の中学生16名が参加しました。これは、海辺の生態系を実感し、自然観察の楽しさを味わってもらうことを目的として企画されたもので、参加者は博物館スタッフ5名とともに、バスで知多半島の野間崎海岸をめざしました。

バスの中でおおよその説明を受け、到着後は、11時の干潮にあわせてすぐに海岸に出て、好天の下で約2時間の野外観察を行いました。アンケートにはその感想が、「生タコをさわられて気持ちよかった。やっぱりタコはスミをはくんだなあと思った」、「アメフラシがやわらかかった」、「自分の予想とは全然違うものでした（軟体動物が嫌いなんです）が、それなりに楽しみました」、「めずらしいウミフクロウをつかまえた」、「ヤ

ドカリの中身をみたり、イソギンチャクが水を出した所が印象に残った」、「思っていたよりも多くの生き物に会えた。触ったりもできて、とても楽しかった。本当に触れてよかった」、などと記されていました。ちなみに、確認できた海藻は15種、動物は50種にものぼりました。

昼食後、近くの海岸で化石探しも体験し、「初めて取りたての化石を見てうれしかった」などと大好評でした。大学に戻り、足立館長から修了証が一人一人に手渡されて、催しは無事終了しました。参加者から寄せられた「すごく楽しかったです。次は泊まりたいな」、「来年もぜひ参加したい」、「来年も行って下さい」といった声に、スタッフは励まされています。



海岸での野外観察



## 博物館で公開展示会・特別講演会が開催される

6月5日から16日まで、博物館の特設コーナーにおいて、「野依研究センター（総称）技術提案書」の公開展示会が開催されました。

これは、2001年ノーベル化学賞を受賞された野依良治 理学研究科教授の功績を称えて建設される「野依研究センター（仮称）」の建設にあたって構成された「名古屋大学野依研究センター（仮称）建設コンサルタント選定委員会」が選定した技術提案書のうち、提出者の了解を得た17の技術提案書を展示したもので、期間中に約850名の見学者がありました。

今回のような公開展示会は本学として初めての取り組みであり、社会に開かれた大学における情報公開の一環として画期的なことと思われます。見学者からも、このような公開展示会があれば次回もぜひ見学したいという声が多く聞かれました。

さらに、8月31日まで開催中の第4回特別展「名帝大けふ誕生 - 初代総長渋澤元治とその時代 - 」に伴い、第16回・第17回特別講演会が開催されました。6月7日には、丸瀬進 名誉教授を講師として、「電子顕微鏡 HU - 2 型をめぐって」をテーマに第16回特別講演が

開催され、学生、市民等70名が参加しました。

特別展で展示された電子顕微鏡 HU - 2 型は、日本の電子顕微鏡の黎明期、昭和17年（1942年）に製造された同型機 2 台のうちの現存する 1 台で、名古屋帝国大学創設の際、渋澤総長が小平日立社長の好意で東山キャンパスに設置した当時の最新鋭機器で、国産初の商用電子顕微鏡で、丸勢 名誉教授は当時これを使用し、その後の電子顕微鏡の開発に貢献しました。

また、6月21日には、第17回特別講演会「渋澤元治の足跡」が開催され、60名以上が参加しました。渋澤元治氏は本学の初代総長で、有名な財界人渋澤栄一の甥にあたり、とくに電気学会の重鎮として著名です。

はじめに、高橋雄造 東京農工大学教授から「我が国電気工学“中興の祖”渋澤元治」を、その後、宮地巖本学名誉教授による「回想 電力工学技術の立場から」、続いて榊米一郎本学名誉教授による「回想」をテーマに、渋澤初代総長の業績・人柄などを、電気学会や本学での活躍などを交えながら、それぞれ講演が行われました。



技術提案書の公開展示会



## 多元数理科学研究科がシンポジウムを開催 「数学の創造」 - 21世紀への挑戦 -

6月17日、経済学部第一講義室において、多元数理科学研究科主催のシンポジウム「数学の創造」 - 21世紀への挑戦 - が開催されました。プログラムは理学部学生を主な対象にした森重文 京都大学数理解析研究所教授による講演「数学学びはじめ」及びディスカッション「20世紀に数学は進歩したか」で、300名以上が参加しました。森教授は名古屋出身で、1980年から10年間本学の助教授及び教授として研究・教育にあたりました。1990年に京都大学数理解析研究所に移って間もなくフィールズ賞を受賞しましたが、受賞理由となった研究は名古屋大学時代になされたものです。講演では、森教授が高校生から大学2年生までの間にどのような数学を学んだかが回顧され、東大の入試が中止され、京大の入学式は1分で終わるといふ大学の激

動の時代であったが、授業がない中で行われた自主ゼミなどでの学びが自分の将来を決定したと、「塞翁が馬」の諺を引いて語られました。

パネルディスカッションでは、森教授、岡本和夫 東京大学教授、土屋 同研究科長、宇澤 同研究科教授及び藤原 同研究科教授のほかに学生もパネラーに加わり、学生からも活発な発言がありました。

シンポジウム終了後、理1号館において懇親会が行われ、森教授を含めた教官と100名を超える学生の親密な交流が行われました。参加した学生からは、「名古屋大学に入ったばかりで専門の様子が全く分からなかったが、このような機会に話が聞けてとても参考になった。」という声が聞かれました。



森重文氏による講演



パネルディスカッション



## 工学部の化学・生物工学科分子化学工学コースが JABEE による技術者教育プログラムに認定

5月15日、工学部化学・生物工学科分子化学工学コースは、日本技術者教育認定機構（JABEE）から、技術者教育プログラムの認定証を授与されました。

JABEEとは、高等教育機関で行われている教育活動の質と国際的同等性を保証し、かつその教育成果が技術者として活動するための必要最小限の知識や能力を養成し得ることを認定するために設立された機関であり、これまでにその基準や審査手順の確立を検討し、平成13年度に初めての認定審査を実施することとなりました。これに工学部の化学・生物工学科分子化学工学コースが応募し、「自己点検書」による書類審査と審査員が来学し行う「実地審査」を経て、「分子化学工学コース（化学および化学関連分野）」のプログラム名で平成13年4月1日から平成15年3月31日の期間について認定を受け、以後、認定期間内に再度審査を受けることで認定は継続されることとなりました。認

定を受けたプログラムは、全国で3大学のみであり、本学としても初めての認定となりました。

このことにより、認定期間内に同コースを卒業した者は、技術者に必要な基礎教育を完了したものと見なされ、技術士第一次試験を免除され、直接「修習技術者」として実務修習に入ることができます。

また、認定に当たっては、明確で独自性のある教育目標の設定と自己点検に基づいた改善目標、具体的な改善策の提示が求められており、JABEEの認定は迅速かつ確実な教育改善を行うためのドライビングフォースとしての役割も大きいと言えます。

（注）詳しくは、分子化学工学コースホームページ（<http://www.nuce.nagoya-u.ac.jp/indexj.html>）または、JABEEホームページ（<http://www.jabee.org/>）を参照。



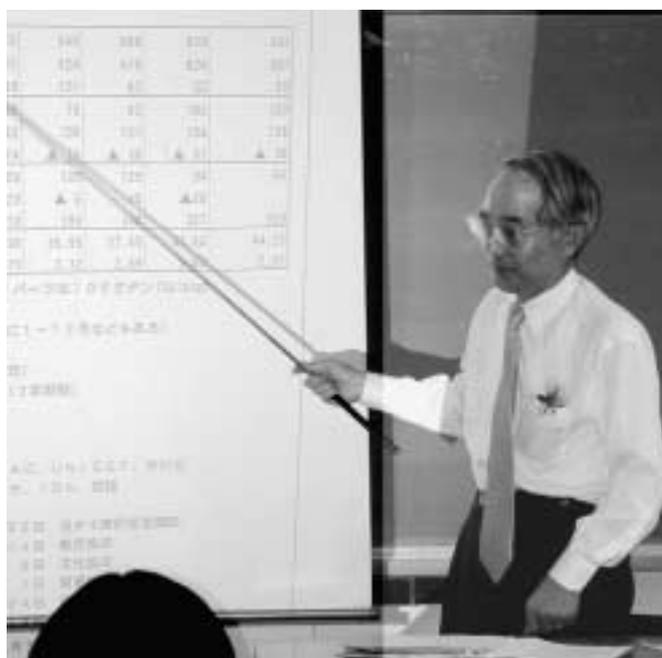
交付された JABEE 認定証



## 農学国際教育協力研究センターが 2002年度第1回オープンセミナーを開催

農学国際教育協力研究センターでは、5月24日、生命農学研究科第4講義室において、村松吉明氏（トヨタ自動車株式会社常勤監査役、元タイ トヨタ社長）を講師として迎え、今年度第1回オープンセミナーを開催しました。「私のタイ トヨタ時代 - 経済危機後の対応 - 」と題するセミナーでは、1996年半ばから2001年3月までタイ トヨタ社長を務められた同氏が、1997年秋からのアジア経済危機に直面した折に、「如何にして社員の首を切らずに乗り切ったか」、自動車部品の品質向上を図るために「タイ人/企業の自主性を発揮させるためにいかに知恵をしばったか」など、経験を踏まえた具体的な取り組みの数々が紹介されました。同氏は、タイ進出のトヨタ系現地法人の幹部と共同して、農村の貧困家庭の子供たちに奨学金を贈る活動や、

励まし活動をボランティア活動として推進してこられた方ですが、セミナーでは精米所を建設するにいたるエピソードなども交え、日本の企業人の今日的なあり方を多くの事例を通じて示唆しました。同氏は、タイトヨタの経営を「タイ化」する方向性を持って進めるという信念/方針のもとで陣頭指揮にあたってこられました。その取り組みの過程では相手国の文化や習慣を尊重して対処する必要があることなど、国際協力を進める上での普遍的な教訓に通ずるエピソードが、人事管理問題等について、いくつも語られました。今回のセミナーには、学内の学生、大学院生、教職員の他、自動車部品メーカー関係者や東京から参加したという銀行関係者まで、30名近い多彩な参加者があり、予定時間を超えて熱心な質疑応答が続けられました。



村松氏による講演



## 愛知県地区新任係長研修を開催

平成14年度愛知県地区新任係長研修が、6月25日から28日までの4日間、本学及び国立乗鞍青年の家において実施されました。

この研修は、同地区の国立学校等で新たに係長（専門職員、看護婦長を含む。）に任用された者に対し、その職務の遂行に必要な知識、行政的視野及び基本的な管理能力の育成を図り、もって大学行政の円滑な遂行に資することを目的として実施されたものです。今年度は、核融合科学研究所を含む7機関から42名（男性27名、女性15名）が参加しました。

研修では、小池事務局長のあいさつ及び「講話」、関部長による「大学行政の諸課題」、伊藤副総長による「名古屋大学における教育改革」、若林国際開発研究科教授による「リーダーシップ」などについての講義が行われました。

また、池原喜忠 名城大学理事による「経営体質強

化のための管理職の役割」、古橋宏造 中部電力人材開発センター所長による「構造改革と企業内教育」など私立大学、民間企業の学外講師による講義が実施されました。

さらに、国立乗鞍青年の家においては、意識の啓発を図るための参加型研修として、8時間の演習が行われました。「係長の役割・部下の育成等」、「男女共同参画」、「倫理」などの与えられた演習課題について、班別に活発な討議が行われ、司会・記録それぞれに与えられた役割に積極的に取り組む姿が見られました。白石人事課長の進行による全体討議についても、OHPを使って適切に発表し、研修生どうし刺激になったとの声も聞かれました。また、朝のつどい・清掃・指導員によるレクレーション等で機関・職種を越えて親交を深め、研修の成果を今後の職務遂行に生かせる大変有意義な期間を過ごすことができました。



受講生全員による記念撮影



国立乗鞍青年の家での班別討議



## 松尾総長に日本学士院賞受賞を報告 - 佐藤彰一文学研究科教授 -

6月10日午前、天皇、皇后両陛下を迎え、東京・上野公園の日本学士院会館において、日本学士院賞を受賞された佐藤彰一文学研究科教授が、6月27日、総長応接室において、松尾総長に受賞報告を行いました。

佐藤教授から授賞式等の報告とともに、贈呈された賞状・記念メダルを披露されると、松尾総長から、「名古屋大学にとっても大変名誉なこと」と祝意が述べられました。

なお、佐藤教授の受賞は、「会計文書による中世フランスの農民社会の研究」が評価されたもので、研究の詳細は、本誌 108「研究ナウ」に掲載されています。



記念メダル



## 総長等表敬訪問一覧

海外等から総長等を表敬訪問された方々は、次のとおりです。(平成14年4月～6月)

月日	学校等)名(国)	代 表 者	来学の目的
4 .19	駐日フランス大使館 (フランス)	M. Maurice COURDAULT-MONTAGNE 全権大使 ほか3名	経済学研究科とボンゼンジョセ工科大学との提携による経営管理学修士コース(MBA)の設立に伴う学内視察のため(経済学研究科)
5 .16	台北駐大阪経済文化弁事所 (台湾)	張 仁人副所長 ほか1名	台湾からの留学生の教育について意見交換を行うため(事務局)
5 31	南京航空航天大学 (中国)	Haiyan Hu 学長 ほか3名	学術交流協定の締結に向けて、今後の学術交流の促進等について懇談を行うため(工学研究科)



## REPORT

# ヤングリーダーズプログラムの調査活動の報告について

医学部・医学系研究科 学務課大学院掛長 松原 盛之

## 調査団

医学系研究科長 勝又義直  
 医学系研究科 講師 伊藤勝基(国際交流委員)  
 医学部・医学系研究科 事務部次長 加藤武夫  
 研究協力課長 渡邊弘樹  
 学部留学生課留学生企画掛長 浅井富士子  
 医学部・医学系研究科 学務課大学院掛長 松原盛之

## はじめに

医学系研究科では、去る5月21日(火)から1週間、平成15年度に実施開始を計画しているヤングリーダーズプログラム医療行政コースのための発展途上国保健事情調査のため、中央アジア2カ国(ウズベキスタン、キルギス)の関係機関を訪問しました。

今回の調査実施は、現在タシケント法科大学へ出張中の本学法学研究科教授の市橋先生にお世話を戴き、ウズベキスタン及びキルギスのJICAを通して、両国の保健省・病院・大学等と連絡を取り、実現したものであり、この実現は、市橋先生はじめ法学研究科の先生方を含む多くの関係各位の多大なるご協力があった結果であります。紙面をお借りして改めて御礼申し上げます。

## ヤングリーダーズプログラムとは

平成13年度設置した医学系研究科修士課程医科学専攻に10名の学生定員を持つ特別コースを設け、極めて高い乳児・妊婦死亡率を持ち、世界的にみて病気負担の9割以上が集中している開発途上国から保健行政・医療行政、医療機関等の運営管理、公衆衛生・予防医学的活動において、将来その国のリーダー的役割を担う人々(5年ほどの実践経験者)を招き、医療行政、医療経済、医療統計等の知識・技能を1年間で集中的に修得さ

せ、本国での医療・厚生行政推進の中心になる人材として養成するもので、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、モンゴル、カンボディア、ミャンマー、ラオス、タイ、ヴィエトナム、マレーシア等を対象国として考えているものです。

## 現地への訪問

さて、調査団の誰もが初めて足を踏み入れるタシケント、空港の税関を通過すると、すでに市橋先生、ウズベキスタンのJICAの方々が出迎えてくれました。到着予定時刻を1時間ほど遅れたこともあって、ホテルに寄らず、その足ですぐにウズベキスタンのJICA事務所に行き、所長はじめ2名と簡単なミーティングを行い、その後ウズベクの日本大使館に行きました。

5時過ぎの訪問になってしまったものの、1時間近く話し合いました。その中で、こちらの目的及び趣旨を話すとともに、中山大使からは、現地の人たちは、識字率については、ほぼ100パーセントあること。愛すべき良い国民性を持っているが、これ(1990年)まで、ソ連邦の計画経済の枠内にあり、生産の一部だけを行うべく組み込まれていた後



ウズベキスタン大使館の中山大使と記念撮影

の独立なので、多くを輸入に頼らざるを得ないこと。また、公衆衛生の面でも課題は多く、私たちのプログラムが時宜を得たものであること。英語は1990年、ソ連邦の崩壊以降多く使われるようになり、学校教育では、随分英語教育の時間が多くなったが、社会では、ほとんどの場で、ロシア語が中心になっており、英語の検定試験( TOEFL )を受験するには、試験料金が高く、とても受けることができないことなど詳細にわたって説明を受けました。

### 2 日目はウズベキスタンの保健省

先方は、次官(保健大臣代理) タシケント第一医科大学長等 6 人が出迎えてくれました。ロシア語のパンフレットを持参したので、よく理解していただき、現在医療行政について色々のことを改善する必要性を考えており、良い人材を送りたいと理解を示しました。また、是非第一医科大学等を見学していただきたい、といわれ、急遽この申入れを受け入れ、午後からタシケント第一医科大学を訪問し、学長との懇談をし、その後博物館の案内・説明を受けました。

### 3 日目はキルギスの首都ビシュケクへ

ビシュケクでは、JICA の事務所を訪問した後、国家外科センターに行きました。副院長はじめ30人前後の白衣姿の医師の出迎えがありました。先方は全員と一緒に話を聞きたい、ということで講義室に案内してくれました。演壇にのぼり、相互の自己紹介後、こちらの計画の話をしました。先方からは、日本の医療のことを中心とした質問が次々と出され、1 時間半ほどがあっという間に過ぎました。

講義室での話し合いが終わったあと、大理石が敷き詰められ、ゆったりとした雰囲気を感じられる大きな空間のある廊下を通してセンター長の部屋に案内されました。

今90歳の老人の手術を終えてきた、と息を弾ませながら、今年70歳になったというセンター長は、日本からは医療設備の援助も受けて助かっている、と数年前の日本政府からの援助に対してお礼を忘れず、こちらのプログラムについての話にも聞き入り、帰りには民族衣装であるマントと山高帽子を研究科長にプレゼントしてくれました。

4 日目は保健省を訪問し、大臣に直接会うことができました。大臣は、キルギスの国民は日本にとっても興味をもっており、交流を切望している。今は経済的改革や他の行政改革と共に医療制度についても改革の時期でもあるので、良いタイミングであり、いい人材を派遣できると思う、と話してくれました。

その後訪問した国家アカデミーでは、30歳半ばの副学長 Aidaruliev 氏と懇談し、現在国の医療保険問題を取り組んでいるが、国民性として、お金を払うという習慣が今まで無かったので、その立ち上げをどのようにしたらよいか検討していること、(私たちの計画に)とても良い企画であり実現することを期待していること、また、現在中国・ドイツ等からの若干の援助も受け、米国・英国からも援助の話がある、と説明を受けました。

さらにスラブ大学では、副学長他医学部長らが、会見とは別に、歓迎の晩餐会をセットしてくださり、楽しいひととき



スラブ大学副学長から記念に民族帽子をもらう  
勝又研究科長



キルギス保健大臣と記念撮影

を過ごしました。芭蕉や芥川龍之介のファンで、詩人を自称するスラブ大学医学部長のピアノに合わせて、即席の「名大合唱団」がカチューシャを歌い、すっかり意気投合し、別れを惜しまました。

5日目はキルギスを取り囲む自然環境について見学しました。国土の3分の2が山岳地帯であるキルギスは、放牧を中心とした産業構造であるといわれ、白い雪景色の山々と、きれいな水、豊かな緑に囲まれており、また、ピュシュケクの全市には、給湯設備がしかれ、いつでも熱い湯がでるしくみになっており、日本の常識では考えられないほど豊かなところもあることが解りました。

6日目は、再びウズベキスタンの JICA に挨拶に行き、これまでの各諸機関の反応について状況報告をし、今後の相互協力等について意見交換を行いました。

現地の人々は明るくたくましい。

ウズベキスタンでは、18歳までの人口が3分の2というだけあって、タシケントの街には若者の姿が多く、明るい雰囲気漂います。ピャーホール、レストラン等若者のグループの客が多く、また、夕食をする多くの店には、若者のバイオリニスト、ピアニストがあちこちでみられ、ライブで、すばらしい音色を奏してくれます。

またキルギスの滞在ホテルで土産物売場に立ち寄ったとき、そこで働いているサイカという少女と話し合うことができました。彼女は英語で、「自分は、将来裁判官になりたい。現在大学3年生で、日本の情報はあまり得られないが、とても興味がある。現在家計が厳しいので、アルバイトで夜12時までこの店で働いたりしており、また、夏休み等にユルタ(6月から10月まで、放牧民族であるキルギスの大多数の家族が家畜に天然の草を食べさせるために、家族ごと高地へ徐々に移動して生活するテント)を織る等のアルバイトをしている」と真実を探し求めるような鋭い、しかし澄んだ眼差しで静かに話してくれました。



キルギス歴史博物館前にて子供たちと

#### 今後の見通し

ウズベキスタンは、1990年まで旧ソ連の計画経済の元で、綿花の生産地になっていたが、そのまま独立国になったために、経済的なアンバランスが、今も残っており、農業国であり経済力はあまりないが、国民は非常に若々しく逞しいものを感じます。また、キルギスは、旧ソ連統治下時代に多くの大学が建てられ、それがいまも引き続き運営されており、周辺各国からも多くの留学生が集まってくるということで、スラブ大学医学部付属病院の学生たちは私たちの計画についていろいろ質問したり、連絡先やメールアドレスを聞いたりするその目は生き生きしており、熱い思いが一つ一つ伝わってくる雰囲気でした。

僅か一週間の出張でしたが、私たちのプログラムを今後推進していく上で、両国は、将来的には、大きな役割を果たす国になるばかりでなく、国力が豊かになれば、国独自の奨学制度等を確立して、日本にも多くの留学生派遣をする可能性も十分あり、今後色々の相互連絡を取る必要があるものの、明るい材料の多い調査活動ができたと思います。

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（14年6月分）

	記事	月日	新聞等名
1	国立大学の教官が相次いで学内でベンチャー企業を創業 本学では再生医療ベンチャーを起業する医学系研究科・上田実教授などがベンチャー育成施設に入居	6.1(土)	日経(朝刊)
2	特許庁は再生医療や遺伝子などの最先端医療に関する技術に特許を認める方針を固めた 医学系研究科・上田実教授「特許庁の方針歓迎」	6.1(土)	中日(夕刊)
3	政府首脳 非核3原則見直し発言「戦争決意の発言警戒しなければ」 法学部・森英樹教授	6.1(土)	中日(夕刊)
4	友よ：森 重文さん(元名大教授)褒美のケーキで数学好き「フィールズ賞」に結実	6.2(日)	読売(朝刊)
5	有事法制と私たち：焦らず議論重ね合意を 法学研究科・後 房雄教授	6.3(月)	朝日(夕刊)
6	研究室発：神経細胞の動き探る 理学研究科・森 郁恵助教授	6.4(火)	中日(朝刊)
7	名大祭講演会のお知らせ	6.4(火)	中日(朝刊)
8	植物「万能細胞」の増殖解明 生命農学研究科・松林嘉克助教授と坂神洋次教授ら発見 医薬品生産に利用へ	6.4(火)	中日(夕刊)
9	新時代の区行政考える 名古屋市懇話会を設置 情報文化学部・安田孝美助教授と経済学研究科・山田基成助教授ら委員に選ばれる	6.5(水)	読売(朝刊)
10	きょうから名大園祭 野依良治教授の研究室公開も	6.5(水)	中日(朝刊)
11	歯胚再生分野に日立メディコ参入 医学系研究科・上田実教授と共同研究	6.5(水)	中日(朝刊) 毎日(朝刊)
12	文部科学省 5、6日にシンポジオンホールで「国際科学技術センタージャパンワークショップ 宇宙天気予報」を開く	6.5(水)	日刊工業
13	8日に天文学講演会開催 名古屋大学星の会 主催	6.5(水)	朝日(朝刊)
14	「測量の日」(6月3日)に、地震火山観測研究センターの山田功夫教授が「忍び寄る巨大地震」と題して講演	6.5(水)	読売(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
15	近況：里山への視線さまがわり 人間情報学研究科・広木詔三教授	6.5(水)	朝日(夕刊)
16	野依良治教授のオンリーワンに生きて - 10 - 「T字型人物」育成を	6.6(木)	読売(朝刊)
17	7日に博物館で丸勢進名誉教授の講演会開催	6.6(木)	中日(朝刊)
18	9日に名大寄席 落語研究会主催	6.6(木)	中日(朝刊)
19	名大祭実行委員会が名大生の仕事に関する意識調査を実施「将来に夢」半数	6.7(金)	中日(朝刊)
20	ニッポン見聞録：優しさ感じる日本人の応援 大学院生・胡 曉霞(中国)	6.7(金)	朝日(夕刊)
21	来月開設する学内ベンチャーのインキュベーション施設 研究者に無料提供	6.8(土)	日経(朝刊)
22	南米チリに設けた電波望遠鏡「なんてん」の観測で、ガス雲多数発見	6.8(土)	毎日(朝刊)
23	新産業の種まきを 経済学研究科・家森 信善助教授	6.8(土)	中日(朝刊)
24	松尾学長に聞く-名大が世界に呼び掛け大学連合 英知集め国際貢献 国連などにも提言	6.11(火)	中日(朝刊)
25	細胞膜に仕切り 科技団グループ(責任者：楠見明弘・理学研究科教授)が世界で初めて発見	6.11(火)	朝日(朝刊)
26	元名大留学生の院長が現状報告 名古屋の善意でバン格拉に病院6年目、治療充実	6.11(火)	読売(朝刊)
27	17日に多元数理科学研究科シンポジウム「数学の創造 - 21世紀への挑戦」開催	6.11(火)	中日(朝刊)
28	21日に名古屋マリオットアソシアホテルにて 国際フォーラム「21世紀の工学を考える」開催	6.11(火)	毎日(朝刊)
29	理学研究科・森郁恵教授、大学院生・毛利亮子さん、遺伝研の桂教授、東大の飯野教授らとの共同研究で情報統合に関与のタンパク質を発見 米科学誌「セル」に発表	6.11(火)	中日(夕刊)
30	老年学：彼女に贈るメッセージ 井口昭久・大学院老年科教授	6.12(水)	朝日(朝刊)
31	野依良治教授のオンリーワンに生きて - 11 - 21世紀 女性の特質生かせ	6.13(木)	読売(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
32	18日に県精神保健福祉協会総会記念講演開催 講師は笠原名誉教授	6.13(木)	朝日(朝刊)
33	豊橋技科大 名大と統合 正式に要請 東海の国立大で初	6.14(金)	中日(朝刊)
34	医学の現場から：糖尿病マウス遺伝学的な実験に不可決 病因解明、新薬開発に貢献 医学部・西村正彦教授	6.14(金)	中日(朝刊)
35	県図書館に歌集324冊 元名大学長の飯島さん寄贈大半が初版本	6.14(金)	読売(朝刊)
36	わが友・わが母校：名古屋大学山を通じて「勇気」学ぶ INAX トステムホールディングス・水谷社長	6.14(金)	日刊工業
37	豊橋技科大の統合要請 名大が検討明言	6.14(金)	中日(夕刊) 他2社
38	欠かせぬ歳出削減策 経済学研究科・竹内信仁教授	6.15(土)	中日(朝刊)
39	14日に「愛知の地震環境と耐震対策」と題して 環境学研究科・福和伸夫教授が講演	6.15(土)	読売(朝刊)
40	叙位叙勲：村上光清名誉教授、正四位に	6.15(土)	読売(朝刊) 中日(朝刊)
41	多彩な研究発表ざらり「国際フォーラム」関連行事「サテライト・フォーラム」が開幕	6.16(日)	中日(夕刊) 他2社
42	国際開発研究科主催の国際シンポジウムにて「明治の読売」活用 大学院生・鈴木さん 語彙研究の成果を発表	6.16(日)	読売(朝刊)
43	生物分子応答研究センター公開実験講座開催案内	6.17(月)	中日(朝刊)
44	理学研究科公開講座開催案内	6.18(火)	中日(朝刊)
45	22日に数学連続講座「数理ウェーブ」開催 多元数学研究科・佐藤肇教授が講演	6.18(火)	中日(朝刊)
46	学生記者が問う 情熱って？ 名大4年の河村智子記者が俳優の別所哲也さんに聞く	6.18(火)	中日(朝刊)
47	学生街ダンス：「学際」が大学を変える？ 名大2年・丹羽亜衣	6.18(火)	中日(朝刊)
48	環境学研究科フォーラム開催案内	6.18(火)	中日(夕刊)
49	国際教育フォーラム開催案内	6.19(火)	読売(朝刊)
50	23、24日に25大学・機関代表「大学の英和」テーマに国際フォーラム開催 松尾学長が14日に記者会見し、期待と意気込みを語る	6.19(火)	読売(朝刊)
51	理学部1年生を対象としたシンポジウムを学内で開催 フィールズ賞受賞者の森重文教授が「数学学ははじめ」と題して自らの大学時代を語った	6.19(火)	読売(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
52	内藤科学技術振興財団の2002年度の助成先を決定 工学研究科・鈴木達也助教授選ばれる	6.19(火)	中日(朝刊)
53	サッカー W 杯 本学の留学生も日本激励	6.19(火)	毎日(朝刊)
54	叙位叙勲：村上光清名誉教授、正四位勲三等旭日中綬賞	6.19(火)	中日(朝刊)
55	次期アイソトープ総合センター長に西沢邦秀教授再任	6.19(火)	読売(朝刊) 中日(朝刊)
56	野依良治教授のオンリーワンに生きて - 12 - 左利きに思いやりを	6.20(木)	読売(朝刊)
57	糖尿病、高血圧など引き金 小児期から正しい食習慣 医学系研究科・横田充弘助教授	6.20(木)	読売(朝刊)
58	生物分子応答研究センター公開実験講座開催案内	6.20(木)	毎日(朝刊)
59	本学名誉教授で前愛知芸術文化センター総長だった飯島宗一さんがアララギ派の初本版の歌集など愛蔵本324冊を県図書館に寄贈	6.21(金)	中日(朝刊)
60	24日に、国際フォーラム開催案内 新世紀の医学教育について	6.21(金)	中日(朝刊)
61	環境学研究科・岩坂泰信教授と、韓国、中国の研究者が中国・東北部の長白山で共同観測する施設を建設へ	6.22(土)	中日(朝刊)
62	絶版の研究書 復刻版刊行へ 名大大学院生・加藤さんや市図書館の職員らが協力	6.22(土)	中日(朝刊)
63	三井化学は来年3月、日仏のノーベル化学賞学者を招き、化学品の効率生産や新素材開発に欠かせない触媒に関する国際シンポジウムを開く	6.23(日)	日経(朝刊)
64	名古屋大学病院が「名大トータルヘルスチェック」として4月から人間ドックを開始	6.23(日)	朝日(朝刊)
65	本年度から実施する県内47大学の学長・総長が交代で講師を務めるユニークな講座内容決める	6.23(日)	中日(朝刊)
66	名古屋大国際フォーラム開幕 海外24大学・機関集う	6.24(月)	読売(朝刊) 他2社
67	社説：21世紀の学術交流 国際学術コンソーシアムに期待	6.24(月)	日刊工業
68	改革本番 大学トップに聞く：松尾総長 研究推進へ支援基盤機構	6.24(月)	日刊工業
69	土曜講座 講師は大学生、医師、サラリーマン 名古屋市・私立愛知中で開講	6.24(月)	中日(朝刊)
70	数学コンクールにあなたも挑戦を 8月17日に開催	6.24(月)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
71	名大と学術協定を結ぶ海外の大学の学長らが意見交換する「名古屋大学国際フォーラム」2日目 名古屋市内のホテルで総会が開かれ、参加した名大と24の海外の大学・研究機関の代表らが単位互換制度などのプログラムを相互に提供する目的とした国際連合「AC21」の設立に合意	6 25(火)	読売(朝刊) 他5社
72	科学技術振興事業団が今年度の戦略的創造研究事業 13研究領域を募集 研究統括:ソフトナノマシン等の高次機能構造体のこう構築と利用 理学研究科・宝谷紘一教授など	6 25(火)	日刊工業
73	工学部主催 夏休みに開くテクノフロンティアセミナーの参加者募集	6 25(火)	中日(朝刊)
74	名大国際フォーラム「AC21」など大きな実り 連携実践へプラン具体化	6 26(水)	読売(朝刊)
75	名古屋大の今年度の「ラジオ放送公開講座・名大リレーセミナー」が7月7日から東海ラジオでスタート	6 26(水)	読売(朝刊)
76	愛知学長懇話会は「21世紀社会のデザインと人間教育」をテーマに12人の学長による講義を開催	6 26(水)	読売(朝刊)
77	医学系研究科・横田充弘教授が読者の相談に答える	6 26(水)	読売(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
78	老年学：老年症候群は共通言語 大学院老年科・井口昭久教授	6 26(水)	朝日(朝刊)
79	29日に博物館サテライトフォーラム開催案内	6 26(水)	読売(朝刊)
80	野依良治教授のオンリーワンに生きて - 13 - 若き「個」よ「私」に走るな	6 27(木)	読売(朝刊)
81	文化：名大の国際交流 礎に 教育発達科学研究科・加藤詔士教授	6 27(金)	中日(夕刊)
82	産業界や自治体との連携を密にし、研究成果を社会に提供するため、産学官連携推進本部を設置	6 28(金)	中日(朝刊) 他2社
83	訃報：井関弘太郎名誉教授 27日呼吸不全のため逝去	6 28(金)	読売(朝刊)
84	C型肝炎 新薬で治療効果ぐんと向上 医学部・吉岡健太郎講師	6 28(金)	中日(朝刊)
85	文化：映画「月のひつじ」 無名の人々の懸命さに感動 理学研究科・池内了教授	6 29(土)	読売(朝刊)
86	ひと：58歳で名古屋大からシカゴ大教授に転じる化学者 工学研究科・山本尚教授	6 30(日)	朝日(朝刊)
87	「日韓」テーマに文学研究科で文化地理学を専攻する山元さんと名古屋韓国学校校長ら研究発表	6 30(日)	中日(朝刊)
88	東海8国立大 20種目で競う体育大会が開幕	6 30(日)	中日(朝刊)

お詫びと訂正

名大トピックス No.108（平成14年5月31日発行）裏表紙「ちょっと名大史」の記事に誤りがありました。愛知医科大学予科の校歌「源清き」の7行目「至高の燦として」の表記を、「至高の光燦として」と訂正させていただきます。慎んでお詫びします。

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話：052（789）2016

FAX：052（789）2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

# ちよっと名大史

## 第八高等学校の正門

この連載第1回(108号)でご紹介しましたように、戦前は旧制高等学校で語学や基礎教養(リベラルアーツ)を学んでから大学に進みましたが、第八高等学校(八高)は、文字通り全国で八番目の旧制高等学校として1908年に創設されました。そのため、名古屋帝国大学(名帝大)が出来た1939年当初は、名帝大とは全く別の高等教育機関でしたが、1949年新制大学発足の際に名古屋大学に包摂され、名古屋大学分校(旧教養部)となりました。なお、番号を校名に冠する旧制高等学校(ナンバーズクール)はこの八高が最後です(八高以降1919年から新たに設置された旧制高等学校は、松本高等学校などのように地域名を冠しています)。

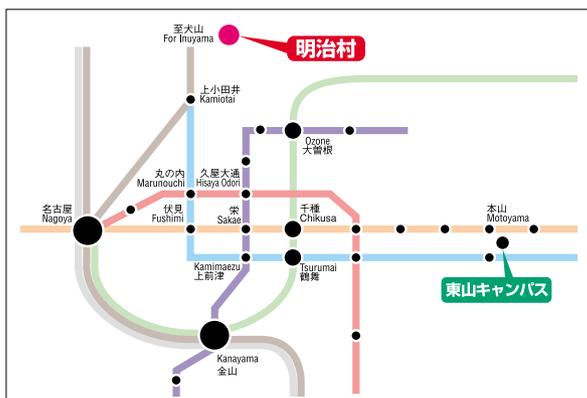
創立当初は愛知県立第一中学校校舎跡地(中区丸の内三丁目2番、現東海郵政局付近)を一時利用していましたが、翌1909年に現在の名古屋市立大学経済学部・人文社会学部キャンパス(瑞穂区瑞穂町山の畑1)の地に移転しました。写真の正門もその時に建てられたもので、左右に脇門をもつ門柱・赤煉瓦と花崗岩との紅白の横縞模様の角柱と袖塀・鉄製門扉・門柱上の電飾燈などは、明治後期の様式の特徴を伝えています。1970年に博物館明治村(愛知県犬山市内山1)に移設され、明治村正門として現存しています。



明治村正門



滝子商店街街燈  
八高正門門柱を模す滝子商店街振興組合(所在:滝子市バス停付近)



明治村



滝子商店街街燈

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物に関する情報をお持ちでしたら、大学史資料室(052-789-2046)へご連絡下さい。